

内部知覺と其對象に就て

務 臺 理 作

ブレンタノ及び其思想を繼承する人々に由れば精神現象は常に其中に内在的對象を含み、それに對する志向的關係に基いて精神作用の特色が明らかインテグゼにされると云ふ。即ち表象判斷・情意の特色とはそれぞれの中に含まれる志向インテグゼに存する。かく志向を其中に含むと云ふ義に由つて、精神現象は物的現象から區別される、物的現象は一の對象と他の對象との關係に於て考へられ、此關係は幾度となく繰返して成り立つと考へられるに對し、精神現象に於ける志向關係は合目的關係であつて、關係の一點は主觀に連なり主觀は再び對象化して考へることの出来ないものとなる。即ち物的現象に於ては一方より他方への關係を翻へすことが出来るが精神現象はこれを不可能とする處に物的現象を以て盡すことの出来ないものが含まれるわけである。一が他プレゼンチールンを顯現する、一が他を意識すると云ふ如き關係がそれである。か様な關係は對象と對象との間にある如何なる關係にも見ることの出来ないものであり、從

つて意識作用の區別をか様な志向關係の特色に求める此派の人々の考へは、これを對象相互の關係に寫して求めんとするものよりもはるかに徹底してゐることを認めざるを得ない。精神作用の分類を試みんとする場合に如何なる人もか様な考を無視することは不可能であると思はれる。

然し乍ら凡そものゝ區別の成り立つには區別の場面がなければならぬ。區別の場面はまた一の特色がかくの如き特色として成り立つ立場でもなければならぬ。

特に精神現象に對しては此考へが大切であらうと思ふ。種々なる意識の志向關係が互に區別され其特色を明らかにする場面とは如何なるものであるのか。ブレンタノがかゝる場面を内部知覺に求めてより以來此派の人々は多少の相異はあるにしても之に類する内觀に求めることに一致してゐる。ブレンタノに由れば精神現象の特色は第一には對象の志向的内在にあるが、次にはそれが必ず内部知覺の對象となることに存する。精神現象とは内部知覺によつてのみ直接に認識せられるものであり、若し内部知覺がそれに向けられぬとすれば吾々はそれに關する一の知識をも持ち得ないものとなる (Brentano, *Psychologie vom empirischen Standpunkte*, S. 35, 126,

127; *Klassifikation*, S. 47)。従つて内部知覺は精神現象の心理學的認識に缺くべからざ

る立場となる。此考へに由れば如何なる精神現象も志向を含むが、即ち合目的方向を含むが、此志向が志向としての意味を示すためには内部知覺の場面を豫想せねばならぬ。内部知覺なければ如何なる意識作用も其自身の意味を明らかにすることが出来ぬ。而して精神現象の特色はかゝる志向の意味を含むと云ふのみならずこれを自らに顯現することに存し、従つて物的現象と區別されて其自身の存在を維持する點が此ことのみに係はるとすれば、如何なる精神現象も内部知覺を豫想せずに自らの特色を維持することは不可能と云はねばならぬ。ブレンタノが精神作用は如何なる場合にもクラールであつて無意識的なるものはあり得ない、無意識を許すは ungeschenes Sehen を許すと同じく *contradictio in adjecto* である (Psychologie, S. 133.) 云ふのも内部知覺を基としてはじめて可能なのであらう。意識作用はそれ自身の合目的志向を持つが、その志向がかゝるものとして内面的に知覺されねば志向も遂に志向たる所以を失つて仕舞ふ。か様に内部知覺は精神現象が志向的體驗として成立する場面をなすものとすれば、單にそれは志向の本質特色を諦視し、其特色にしたがつて分析する場面、換言すれば心理學的認識の基礎的場面であるのみならず、作用の特色が純化され、かくの如き特色として自らを維持する場面ともならねばなら

ぬ。

然し乍ら此見方は布伦タノの心理學から其まゝに導かれるものでない。布伦タノに由ると内部知覺は精神作用の特色を認識する立場であるが、しかし何處までもそれは「認識」に留まり、認識作用として他の表象や判断と同じ様な意識の一作用に屬する。内部知覺は意識が自らを認識する際の一作用であつて、意識の特色を維持する様なものとは考へられぬ、寧ろそれは如何なる精神作用にも *nebenbei* に (アリストテレスの言葉で云へば *ἐν παραπύρῳ* に) 同伴する認識作用の一種として考ふべきであると云ふ (Klassifikation, Anhang, II)。[○]これに對して私は眞に内部知覺に由つて精神現象の特色が明らかにされるならば、内部知覺は本質分析又は本質諦視の立場として其自身を精神作用一般の制約の許に置く様な一知覺作用と見るべきではないと考へる。また眞に精神作用の特色が、其本質のすがたに於て諦められる立場は、唯そののみに於て精神現象の特色が成り立つ様な立場でなければならぬ。物的現象に於てはともあれ精神現象に就いては、特色が直ちに實在であり、實在は直ちに作らきである、作らきがクラールになる場合に於て作らきが純粹となり、純粹相を得る事は作らき其ものゝ成立となるかと考へたいのである。本質を諦視する立場に於てのみ

本質が成り立つと考へたいのである。もつとも所謂精神現象なるものは其ままでは決して純粹なものではない。精神現象は物的現象と深く結合し物的存在と不可分離的に考へられて居る。然し物的存在と云ふとは精神現象の本質ではなく、物的なるものを志向する所に精神現象の特色がある。精神現象の特色は志向作用に存して事物的存在には存しない。それ故作用の特色を支持する立場は、物的存在に結合して考へられる様な精神現象の立場とは根本的に區別されねばならぬ。作用の特色はインテンチオに存しインテンチオの立場はかねて内的諦視の立場と合一せねばならないと考へたい。此考とブレンタノの間にはかなりの距りがある。

内部知覺と云ふ言葉は何に對して「内部的」であるのか、その意味の決して一義的でないのは、丁度カントの内部感覺(Innerer Sinn)と云ふ言葉の如くであること夙にフツサールの指摘する如くである(Husserl, Logische Untersuchungen, 2 Aufl. 2 Bd. II Teil, Beil. 2c.)。さり乍ら内部外部の區別をフツサールの云ふ如き十全不十全の語にかへたにしても、十全知覺が若しも意識作用の一種としての知覺に留まつてゐるならばブレンタノの立場を出でて居ないわけである。若し「内部」と云ふ語に不都合があるなら

ば單に知覺と云つても差支ないと思ふ。ブレンタノに由れば、内部知覺のみが嚴密な意味での「知覺」であると云ふからである (Psychologie, S. 119, 120, 127)。私は先づブレンタノが、一精神作用としての知覺に如何なる特性と位置とを與へてゐるかを考察して見よう。

ブレンタノに由れば如何なる精神現象も必ず二つの對象を含む、一つは志向的に、インテンチオナール他は顯在的にヴァイタル。志向的な對象とは視るとか聽くとか又は想像するとか云ふ如き表象作用に於て把捉される色や形や音の屬する世界であつて、彼は此を第一次の對象と呼ぶ。第一次の對象には彼の分類に於ける物的現象其中に他を志向的に内在せしむることも顯現せしむることもないもの(の)のすべてが屬するのみならず、觀察や記憶の對象となる様な過去の精神現象も之に屬する。かゝる一次の對象に直接的に關係するものは數ある精神作用の中で唯表象だけである。對象をインテンチオナールに含むものは表象を措いて他にない。彼に由れば表象とは意識作用と一次の對象とを結び付ける唯一の窓口である、表象すると云ふことが眞に對象を志向的に含むと云ふことである。然しかゝる表象作用はそのまゝに終るものでなく、自らまた自らの對象となる、これ第二次の對象であつて、これは常に精神作用であるのみ

ならず殊に表象作用に限られ、一次の對象が志向的であるに對し顯在的である。即ち此場合では意識するものと意識せられるものが唯一顯在の精神作用である。かゝる二次的意識を彼は内部意識又は內的經驗などと呼ぶ。内部意識は一次の意識から獨立してゐるものではなく、唯一なる作用の要素としてのみこれに同伴するのである。已に同伴的なものであるが故にその成立には必ず一次の意識たる表象が前提されねばならぬ。表象なくして如何なる内部意識も成り立ち得ないと云ふとに由つて表象はすべての精神作用の心理的前提 (psychologische Voraussetzung) なる。此考へはマイノング、ヘフラー等に於て一層明瞭になつて來る。さて、内部意識は表象を對象とするが、表象は對象に志向關係を持つ故に内部意識は表象を通して對象に志向關係を持つ。此志向關係の特色に基いて彼は内部意識を内部表象、内部認識判断、内部情意の三團に別つ。此處に問題として考へ來つた内部知覺はこの内部認識と同じものなのである。内部認識としての知覺は、知るものと知られるものと同一であるために最も直接的な、確證的認識を精神作用一般に對して持つことが出来る (Psychologie, S. 119, 182, 188, 202.)。即ちブメントノに由れば内部知覺の機能を以てフツサールの所謂本質諦視^{ウエーゼンサントウシツ}の立場と見ると共に (Vgl. Klassifikation, S. 35, 77.)、他

方に於て猶これを一精神作用と見るがために、その結果は次の様にならざるを得ない。(1)内部知覺は一作用として他の作用と同様に夫れ自身の獨立性を持つことなく、對象に關係するに際して必ず表象を前提せねばならない、即ち表象なくして存在することが出来ない、(2)然し表象がまたかくの如きものとして其特色を明かにするために却つて内部知覺の諦視を豫想せねばならない、(3)内部知覺夫れ自身も一作用としてかくの如き機能を持つためにまた内部知覺を豫想せねばならない。而してこれ等は、如何に簡單な精神作用も一方に於ては内部知覺を必ず *nebenbei* に同伴し、他方には必ず表象の先行を前提すると云ふブレインタノの考から當然引出されて來るものである。かゝる結論の間に何等か自己撞着の如きものが含まれて居らぬであらうか。

表象を以て「心理的前提」と見る立場に従へば表象はすべての精神作用が由つて以て存在する基底をなす。内部知覺のためにすべての精神作用がクラーレルとなり夫れ自身の意味を顯現すると云へば内部知覺は意味認識イデアチヨレンの立場となる。而して此二つの立場は決して混すべきではないと云へば、内部知覺を以て、表象を前提として成り立つ様な一精神作用と見る如き考を根本的に訂正せねばならぬであらう。更に

意味認識又は本質諦視と云ふ如きものが單にその對象を靜觀し、單にその意味分析をすることに由つて完うされるものでなく、眞にこれを諦視するためには其ものに合體して内より直觀せねばならぬ。即ち對象と諦視點の間に何ものをも介在せしめず、其作らきに於て其ものを知るに到らねばならぬと考へるならば、より明らかに内部知覺をもつて心理的一作用と見る立場から離れねばならないであらう。第一には内部知覺はもはや心理的對象として考へられる様な一精神作用でなく、すべての精神作用に内在する意味本質を諦視する新なる立場とならねばならぬ。而して此立場はブレントノにとつては別に新奇な感を起すべきものでなく、寧ろその内部知覺説を純化すれば當然到らねばならないものである。第二には、かゝる本質諦視の立場は、精神作用を知的に靜かに見つめて行くこと云ふばかりでなく、そのものになつて作らく、作らくと云ふのも其ものに引き込まれられてゆくのでなく、寧ろこれを純化し其本質を十全的に顯現せしむる意味に於て作らかねばならぬ。精神作用を知るに自ら作らくより直接なるはない、それに含まるゝ意味を明らかにし得るものは唯志向自身の作らきのみである。然し此立場はたゞにブレントノにとつて新奇であると云ふばかりでなく、一般心理學的考究にとつて多くの難點におも

てを向けねばならぬであらう。若し内部知覺が何處までも心理學的認識にとつて缺くべからざる第一方法の立場であるならば、かくの如き立場を作用の「行」に求むることの困難なるは云ふ迄もなからう。「行」は學的認識ではない。「行」はロゴス以上のものを含んでゐる。學的認識がロゴスの立場に留まらねばならぬとすれば、内部知覺も此處に留まらねばならない。然し又他方から見れば、ロゴスの立場が行の立場を離れてゐるとは如何にしても考へられぬ、ロゴスは行の一面でなければならぬ。内部知覺は何處までも意味認識イデアテオンとして、知的立場をはなれずに、しかも行の中心にまで觸れねばならぬ。然らずんばそれによつて作用を認識し得るとは云はれない。主知的と主意的の中間にイミ、諦と行の孰れをも失はずして始めて眞の方法的立場を持し得られるであらう。これ極めて困難な問題ではあるが、内部知覺の問題は此處まで到らねばならぬであらう。

此第二の問題について私はまだ自己の考を十分明らかにし得る自信はない、此處では主として第一の問題について、ブレンタノから跡づけ得るものだけの中から、内部知覺を一精神作用と見ることの種々なる難點に陥ることを明かにして見たいと思ふ。

内部知覺をば純粹諦視の立場と見るためには内部知覺を意識の一作用と見る様な考から離れねばならない。然し知覺の位置を全然作用の間から取り去ることは心理學の立場に於て忍び得ぬことであらう。忍び得ぬと云ふのは他の表象や判斷などと同じやうに知覺についてもその中に一作用としての特色を見ることが出来ることと信ずるからである。布伦タノは知覺を以て判斷の一種とし、その認識に直接的確證を持つことを特色として擧げたが、それだけでは未だ十分とは云はれまい。其點は彼の考へを繼承するマイノングの方が遙かに詳しい様である。マイノングの書いたものゝ中で此問題を主目としてゐるものは

Ueber die Erfahrung grundlagen unseres Wissens, Abhandlungen zur Didaktik und Philosophie der Naturwissenschaft, Heft 6. 1906.

である。此論文は始めに知覺一般について、次に内部知覺と外部知覺について述べてゐるが、彼は布伦タノと同じ様に内部知覺が嚴密な意味での知覺であると考へるから、知覺一般の特性として擧げてゐるものが内部知覺の本質的特色をなすものと見て差支がない。

マイノングに由れば知覺は二つの要素から構成されてゐる、第一の部分は知覺表

象第二の部分は知覺判斷である。知覺の特色は主として此第二の要素に存するのであつて例へば幻覺と知覺の區別が如何なる點に存するかと云へば二者の持つ表象の側にあらずして、對象の實在に關する判斷の點に存する。かく知覺の本質的なものが判斷に存するとすれば疑ひもなく知覺は判斷作用の一種であるが、その一種としての判斷は如何なるものであるか。これを對象學的に見ると知覺の對象はオブジェクトでなくてオブジェクトである。樹を知覺するのでなく「樹が此處に在る」ことを知覺する。従つて知覺の對象は *Soseinsobjektiv* でなく *Seinsobjektiv* であり、後者は更に成立と存在ベシタートに別たれる故、詳しく云へば「存在」のオブジェクトである。それ故知覺判斷は必ず存在判斷となるのである。然し知覺判斷は單なる存在判斷に留まつて、*Sosein* の判斷になり得ないものであるか、或はなり得なくともこれに關係を持ち得ないのであらうか。例へば窓を開いて「眼前にある牧場は緑だ」と云ひ「牧場の緑なのを私は見る」と云へば、これは明らかに *Sosein* に關係してゐるが、これを知覺判斷と見ることは出来ぬであらうか。マイノングは明らかに知覺判斷ではないと云ふ。何故と云へば、上の如き *Sosein* の判斷は知覺に表はれる第一の判斷ではないからである。その成り立つたためには、必ずそれに先立つてかくの如き性質 *Sosein* を有す

る牧場が「此處に在る」ことの判断、即ち知覺判断が豫想されねばならぬからである。詳しく云へばか様な *Sosein* の判断の成立には二つの路すぢが必要とされる、第一には、知覺に現はるゝ表象の一群が分析されて、その中にある *Sosein* が特別の注意を以て取り出され第二にはそれが已知の言表(例へば綠に結び付けられることであつて、かくして「場は綠だ」と云はれるのである。しかしかゝる路すぢは双方とも對象の性質から先天的、必然的アプリオリジエに出て來るものであつて、直接的顯在的な知覺の判断とは區別されねばならぬ。却つて此等のなり立つたためには全體としての體驗内容が與へられねばならぬ、かゝる體驗内容の存在を認識するものが知覺判断に外ならない。即ち知覺判断は *Sosein* の判断でなく常にポジチフな *Sein* の判断である。同じく知覺判断を命名判断ベネンシオンズルゲイムと間違へてはならない。「私は或ものを見てゐる。それは槍だ」と云へば明かに命名判断であつて、必ずしもそれは直接的な認識ではない、それはネガチフにもまた謬りにもなるからである。かくの如く知覺判断は夫れ自身としては直接的な *Sein* の判断であるが、それにも係はらずマイノングに由れば *Sosein* の判断に深く關係してゐる。如何なる知覺判断もその中には多くの *Soeinsintuit* を内含して居ると云ふ。

知覺の對象は「存在」のオブエクチフであることはこれで明かにされたが、オブエクチフは一般にポジチフとネガチフに別たれる。普通の判斷は、此孰れをもとり得るが、知覺はその顯在性と直接性のためにネガチフなるものをとり得ないと云ふことも注意すべき特色と云はねばならぬ。以上の説述をまとめて彼は *Ein auf eine Wahrnehmungsvorstellung gegründetes, unmittelbar evidentes, affirmatives Existenzurteil über gegenwärtiges Ding kann, soviel ich sehe, nur eine Wahrnehmung sein.* (Ebdend., S. 16-36) といふのである。

以上の知覺説はやがて内部知覺の特性を語るものである。内部知覺に關する考察はマイノング一流の極めて精細なものであるが、要するに内部知覺は意識の存在に關する肯定的判斷だと云ふことになる。かゝる見方は彼のみならず例へばヘフラーなども「知覺される」と云ふことは「それが、私の中に存在するものとして判斷される事」だと云つてゐる (Grundlehren der Logik und Psychologie, S. 258)。か様に知覺判斷をもつて存在判斷とする此派の人の考に對しては、當然一方には、知覺の對象は *Sein* に關してのみならず、*Soein* に關して、従つて性質の知覺が可能であると云ふ反對説が考へられるわけである。マイノングは *Soein* は本質上イデアルなものであるから知覺の對象にはなり得ないと云ふけれど、ブレンタノは必ずしも知覺は存在判斷であ

るとは云つてゐない。内部知覺の直接的確證が何についての確證であるかを知るためにブレンタノの考を見れば彼は eine unmittelbare, evidente Erkenntnis des Actes (Psychologie S. 188.)と云つて「作用の存在とは云はない。而して作用の認識は作用が」在ると云ふよりもむしろ「かゝる志向に於てある」と云ふに關するものではなからうか。そして作用に於てのみ吾々はイデアルな *Sosein* の代りに顯在的な *Sosein* を見るではなからうか。次にまた他方には、知覺の對象が常にポジチフであり其「判断」は肯定であること云ふ考に對して若しも知覺に否定があり得ないとすれば、かゝるものを「た」とへ特殊的とは云へ尙判断の名で呼び得るであらうか、否定を持ち得ない運命に置かれた判断と云ふ如きものがあり得るであらうか、と云ふ考が當然起り得るわけである。此様な問題に就いて私の知る範圍では、

Oliver v. Hazay, Gegenstandstheoretische Betrachtungen über Wahrnehmung und ihre Verhältnis zu anderen Gegenstände der Psychologie, Zeitschrift für Psychologie, Bd. 67. 1913.

が興味ある考を述べて居る。

知覺の對象をオブエクチフと見るのは Hazay もマイノングの如くであるが、知覺の特色はマイノングなどは異なつてゐる。その第一の點は心理學的特色とも云

ふべく、知覺は判斷の一種ではなく、さりとて假定アソナリーでもなく、ひとしくオブエクチフを對象としながらそれ等と異なる種類と見ると、第二の點は對象學的特色とも云ふべく、知覺の對象は Sein であるばかりでなく Sosein のオブエクチフでもあると云ふのである。第一の問題を簡單に述べて見ると、知覺の對象は判斷假定アソナリーと同様にオブエクチフであるが、判斷などと異なるのはその持つ、諦視の直接性にある。其對象を把握するにあたつて恰かも對象が吾々に押し迫り吾々に印象を押しつけるが様に感ぜられる。然るに判斷に於ては對象と吾々の間に對象に對する決定作用が介在して間接的になると共に吾々には能動的自由的なものが現はれる。かゝる區別に由つて見ると所謂知覺作用は二つの部分に別たれ、其第一は純粹な知覺であり第二は寧ろ附屬的な意味作用である。知覺が對象を顯現プレゼンテーレンすると云ふ特性はこの第一の部分にあるが、これは命題的には寧ろ言ひ表はし難い。第二の部分は知覺特有のものでなくして判斷の一種である。判斷の一種と見らるゝものはもはや本來の知覺ではない、その點がマイノングと異つてゐる。例へば「是は樹だ」と云ふ經驗認識に於て、

「dies ist so」又「hier ist ein Solches」云々の第一「ein Solches ist ein Baum」云ふは第二の部分となる。第二は所謂命名判斷であつて知覺ではない（これはマイノングと

同様である)これは一の意味作用として對象の存在から離れて「ein Solches ist eben ein Baum」と云ふとが出来るからである。これは否定的にもなり得る。これに反して第一の部分は常に直接的に對象を顯現して知覺に特有な確證をば示す。判断は肯定否定の孰れをもとり得るが第一の部分はもはや此對立ゲゲンザツを持たない吾々の前に自らを顯現しないものを知覺することは出来ないからである。知覺作用は肯定のみであり、其對象からは非眞の對象(unwahren Objektiv)のみならず凡てのネガチフなものが除かれる。此點が知覺と判断の區別點であるのみならずまた假定との區別點ともなる。特に假定は確證を缺いてゐる故その相異は著るしい。マイノング及其派の人はオブエクチフは判断か假定の對象であると云ふが彼に由れば猶其外に知覺の場合があるわけである。此結果として知覺は判断なごよりも對象の構造に深い關係を持つ。判断假定では對象がポジチフであり且顯在的なのは云はゞ偶然と考へらるゝに對し知覺では必ずかゝるものにあらざれば對象となり能はぬからである。

次に彼は知覺の對象に關する第二の問題について次の様な考を述べてゐる。マイノングは知覺に結付く *Sesein* の判断は知覺對象に含まれてゐるものから分析に

由つて成り立つもの、即ち間接的に成立つものと考へる爲に、知覺判斷は存在判斷である云ふのであるが、然し *Sosein* は必ず分析によつて把捉されるとは限らない。例へば「牧場が緑だ」と云ふ場合はマイニングの様に考へられるにしても、霧ばんだ牧場を見て「牧場は灰色だ」と知覺した場合、この言表は「牧場」の分析からアブリオリツシユに取出すことは出来ない。マイニングは「私は檜を見る」と云ふ場合、(一)「私は或ものを見る」(二)「かく見るものは檜だ」の二部分になると云ふが、第一の部分に於て對象の *Sosein* を知覺せずしてどうして「或もの」と「檜の同一性を認められよう。マイニングは知覺を以て「判斷」の一種と考へる故にその對象は *Sein* だけとなつたのは無理もない、誰しも本來の *Sosein* が知覺で「判斷される」とは考へ得ないからである。然し知覺をば判斷と異なるものと見れば、其對象を顯在的な *Sosein* としても別に不都合はないわけである。知覺の對象は *das hier und jetzt gegenwärtige positive Sein und Sosein existierender Objekte* を見るゝことが出来る。而して *Sein* を *Sosein* とは常に結び付いてゐるから如何なる場合でも *Sosein* の知覺に於て *Sein* の把捉、*Sein* の知覺に於て *Sosein* の把捉が含まれる。

Hazy の知覺説は大要以上の如くであるが、知覺をば判斷の一種と見る様な從來

の考から離れた點を私は面白いと感ずる。また知覺が判斷とちがつてオブエクチフの構造にまで入り得ると云ふのも、作用と對象を餘りに區別しすぎるボルツァノ以來の考に對する注意を喚び起す。然し乍ら他方に於て彼はブレンタノやマイノング等が知覺を判斷の一種と考へたよりも一層特殊的な一作用としての位置にこれを陥れてゐる。彼は思考作用を三分して判斷・假定・知覺とする。マイノングがこれを二分して判斷の他に假定アンナヘの特性を主張するに對してブレンタノの流れを共に汲むマルチャーさへ反對してゐる(A. Marty, Ueber Annahmen, Zeitschrift für Psychologie, Bd. 40.) ことを思へば更に新しく知覺を區別するに對する論難は極めて多いことであらう。のみならず判斷よりも更に制約付けられた特殊の作用とするとは、知覺をもつて意味認識、本質諦視とする様なブレンタノの根本思想を危くするものである。何故となれば特殊な一作用としての知覺の特性が鮮やかになればなるほどそれは諦視されたもの、本質を見出されたもの、或は與へられたものであつて、これを諦視するものでなくなるからである。即ち知覺が諦視するのでなく知覺を諦視することとなるからである。若し彼にならつて知覺を判斷の一種から解き放つならば、またすべての精神作用から解き放たれた立場のあることを豫想せねばならない。

マイノングもハツツアイも知覺の特色を物的存在に結合して見たのではなく、孰れも其本質的なものを内的に觀照したわけであつて、かくの如き特性を持つた一作用としての知覺が精神作用の中に數へられると云ふことは誰しも疑ひ得ない處であらう。知覺の特性を特に對象學的に明らかにすればする程知覺作用が特有なる一形態ゲシュタルトをもつて意識に屬することを認めざるを得ない。知覺作用を作用のグループの中から取去ることは忍び得ぬ許りでなく思ひ及ばぬことである。然し精神作用の意味認識の立場、本質諦視の根柢はかゝる意味での知覺と區別せねばならない。この區別は已にブレンタノに於て明らかに爲さるべくして爲されなかつたものである。内部知覺を意味認識の場面と見る點と、これを認識作用の一種として内部意識の中に見る點とは區別されねばならなかつた。

この區別の困難は恐らく内的諦視を内部知覺に求めたブレンタノの出發點に潜んでゐたものであらう。凡そ精神作用の本質を明らかにするに内部知覺より直接なるはない、従つて種々なる志向關係を見るには内部知覺に由る外はないと云ふブレンタノの最も優れた考へ、精神作用を概念から見るのでなく、寧ろ概念又は言表の適切に表はさんとする背後の志向的體驗に深く入らんとする路を内部知覺に置い

た考への中に潜んで居た。か様な困難が其處に潜んでゐたと云ふのはブレンタノが諦視の立場を特に知覺に求めたと云ふことにあるが、然し他方から考へて見れば、これを知覺に「求めた」點でなく、「知覺」そのものゝ本質に宿つて居る様である。諦視の立場分析の場面が内的直觀を離れぬ限り知覺の作らきと結び付く、結び付けば必ず上の困難に到らざるを得ないのである。私は内的諦視と單なる知覺作用とは明らかに區別せねばならないと思ふ、單なる知覺は諦視されるものであつて諦視するものでない。然しそれにも係はらず内的諦視は知覺をはなれ知覺なくしてあり得ないこともまた疑ひないと思ふ。色や音の本質を諦視するには色や音の直觀に由る外はない、即ち知覺を通して見る外はない。本質諦視はそれ故に知覺の知覺の立場となる。同様にして想像の知覺とか判断、情意の知覺の如きものが考へられ、かくしてブレンタノの所謂内部知覺は諦視にとりて缺くべからざるものとなる。「知覺」と云ふ言葉の中には諦視の作用をなすものと、諦視せられるものを含んでゐる。此考へによつて私は一方に本質諦視の立場と心理作用としての單なる知覺とを區別し、従つて内部知覺と云ふ如き多義的言葉を避けんと欲すると共に、他方には、純粹作用としての知覺を全然はなれて作用の本質諦視がなり立つと云ふ考へに反對した

此處に興味をひき起すのはハツツアイが知覺の對象として考へた顯在的な *Sosein* である。所謂 *Sosein* はイデアルなものであつて、知覺の對象となり得ぬばかりでなく一の知的形態として作用を超越すべきものであらうが「顯在的」な *Sosein* とは寧ろ純粹作用そのものとなるではなからうか。純粹なる作用はそれの *sein* にあるのではなく、顯在性即ち内面的強度を持つ *Sosein* にあるではなからうか。それがネガチフをとり得ぬのも直前の作らきの然らしむるところ、これを翻へし能はぬ直接性に基つくではなからうか。従つて作用の認識は此意味での *Sosein* の認識とならねばならぬ。もつともマイノングの如く *Sosein* をば判断對象としての抽象體と見ればこのことの不可なるは云ふ迄もないが、純粹の *Sosein* とはかくの如き抽象體として互に孤立してゐるものでなく、夫れ自身の意味に従つて無限に結合するものであり、その結合の一々が、志向的且合目的全體を構成し、此全體が吾々の志向體驗と呼ぶものとなるではなからうか。若し此考にして許されるならば顯在的な *Sosein* は單なる知覺作用の對象たるに留まらず直ちに内的諦視の對象となり、知覺はそれに伴ふ *cogitatio* の如きものとなる。 *Sosein* が *Sosein* として作らくと云ふのは盲目的無意識的

に作らくのではなく、澄徹したロゴスの對象として、かくして常に學的認識を離れな
いものとして作らくのである。(九、一〇)